論　文　の　和　文　要　旨

論文題目	事象を項に取るドイツ語形容詞と 事象を表す語句の統語論的実現と意味的特性 ―事象のアスペクト的解釈の対立を手掛かりに―
氏名	信 國　萌

本稿では、ドイツ語形容詞の中でも、事象の性質を表す形容詞に着目する。事象の性質を表す形容詞とは、„eine schnelle Fahrt“（速い走行）の schnell（速い）、„Das Problem zu lösen ist leicht.“（その問題を解くのは容易い。）の leicht（容易い）などである。これらの形容詞が性質を表す事象のアスペクトに特に注目し、その違いにより、形容詞が現れる統語的、意味的環境がどのように共通・相違するのかを明らかにすることが、研究の目的である。従来あまり取り扱われていない、事象を項に取るドイツ語形容詞に関して、その現れる統語環境を精査し、形容詞ごとに現れる統語環境に違いがあるのかどうかを調査した。

本稿では、コーパスを用いて、主に以下の 3 点を調査・分析した。

① 事象を項にとる形容詞の統語的分布（述語的、付加語的、副詞的）
② 事象を項にとる形容詞と、事象以外の対象（事象の参与者としてのモノ）の意味的な関係
③ 形容詞が項に取る事象のアスペクト（状態、活動、到達、達成）

これらの調査結果の分析から、事象を項に取る形容詞の様々な統語的実現の特色が、事象の参与者となるモノ項と、事象のアスペクトに起因することを示した。特に、事象を項に取る様々な形容詞に共通して、事象のアスペクトの対立（有界的 vs. 無界的）が影響を及ぼしており、それが統語的に反映されていることを明らかにした。

本論は、全６章から成る。以下、各章の概要を記す。

第１章では、本稿で取り上げる、事象を項に取る形容詞について説明した。また、研究の際に重要な概念である存在論的カテゴリー（モノ、事象、命題）の概略を説明した。研究対象として、事象を項に取る形容詞を選ぶこと、また、その選択には Vendler (1968) を特に参考とすることを確認した。研究課題として上記の 3 点を挙げ、本論文の研究目的を示した。

第 2 章では、存在論的カテゴリー（モノ、事象、命題）の区別を詳細に扱った。特に、形容詞の叙述対象となる事象が、モノや命題とどのように相違しているのか、柏端 (1997) の記述を中心に、Davidson の存在論的な観点からまとめた。また、Vendler (1968) や Ehrich (1991) などを参考に、モノ、事象、命題がドイツ語では統語的にどのように実現されるのかを整理し、形容詞が事象を項に取る際の表現形式をまとめた。さらに、存在論的には同じ個体というカテゴリーに属するモノと事象が、言語的にはどのように共通・相違するのかを Ehrich (1991) や Leiss (1992, 2000) などを引き合いにまとめた。それにより、主にモノを表す名詞に内在的な数の対立（可算／質量）と、主に事象を表す動詞に内在的なアスペクトの対立（到達・達成／状態・活動）を、有界的／無界的という共通の基準で区別できることを確認した。さらに、事象の下位分類である出来事（到達・達成・活動）と状態の区別にも目を向けた。これらのことから、形容詞が項に取る対象として、モノと区別して事象を扱うにあたり、とりわけ事象のアスペクトに着目する意義を示した。

第 3 章では、形容詞と、形容詞が項に取る事象の関係についてまとめた。特に事象を項に取るドイツ語形容詞にどのようなものがあり、形容詞と事象の間にどのような統語的、意味的関係があるのかを、先行研究を踏まえて整理した。形容詞が付加語的、述語的に結びつく名詞の種類や、その名詞が表示する対象と形容詞の意味関係の違いに応じて、英語形容詞を分類した Vendler (1968) を取り上げ、本稿で調査するドイツ語形容詞の選定の参考とした。また、「モノ」と「事象」のどちらの性質も表しうる形容詞の意味解釈の違いが、特にドイツ語でどのように捉えられているのか、先行研究をまとめた。さらに、ドイツ語では、「モノ」を表す名詞の有界性による対立（可算／質量）が、形容詞が名詞を修飾ないし叙述する際の名詞の選択や意味解釈の決定に寄与することを確認した。それにより、同じように有界性という基準で分類できるドイツ語の「事象」を表す動詞の対立（到達・達成／状態・活動）も、形容詞の名詞選択や意味解釈の決定に影響を及ぼすのではないかと論じた。また、Davidson (1967) により、副詞的用法の形容詞を、事象に適用される述語とみ

なせることを確認した。そして、ドイツ語で様態を表す副詞的用法の形容詞が、「純粋な様態」や「動作主指向の様態」など様々な意味関係を表しうることを、Maienborn (2003), Schäfer (2013) に基づいてまとめた。

第 4 章では、事象を項に取る形容詞が実際にはどのような統語的・意味的環境に現れるのかを調査した。調査には、IDS（ドイツ語研究所）によりインターネット公開されている、大規模なコーパス調査分析システム COSMAS II の DeReKo（das Deutsche Referenzkorpus）を使用した。調査対象の形容詞は、Vendler (1968) を参考とした、以下の 4 種類、9 語の形容詞である。

I: schnell（速い）・langsam（遅い）
II: leicht（容易い）・schwer（難しい）
III: vorsichtig（慎重な）・leichtsinnig（軽率な）
IV: überdrüssig, satt, müde（いずれも「うんざりしている」）

それぞれの形容詞につき 300 事例ずつ収集し、上記 3 点の課題に関して調査・分析を行った。それにより、Vendler (1968) の英語形容詞の分類が、概してドイツ語にも当てはまることが確認された。一方で、英語にはないドイツ語の副詞的用法について、形容詞によって副詞的に使われやすいものと使われにくいものがあることなどが確認された。また、形容詞により、現れやすい統語環境が異なることを確認した。さらに、形容詞が事象に優先的に求めるアスペクトがそれぞれ異なることも、調査の結果、明らかになった。形容詞 I では Vendler (1967) でいう「活動」が、形容詞 II では「到達」が優先される。形容詞 III の 2 語はどちらも「活動」のアスペクトと結びつきやすいが、leichtsinnig は「到達」とも結びつく。形容詞 IV は無界的な事象（「状態」「活動」）と結びつきやすいことが明らかになった。さらに、形容詞が優先的に求めるアスペクトに応じて、文の事象のアスペクト的な意味解釈が変わることも確認した。

第 5 章では、第 4 章の調査結果をまとめた。事象を項にとる形容詞には、本質的に事象の性質を表すもの、本質的には人の性質を表すものの 2 種類があることを確認した。また、事象を項にとる形容詞の統語的分布を確認し、それにより、ドイツ語では事象の性質を表すのには副詞的用法が、人の性質を表すのには述語的用法が適していると考えた。さらに、形容詞と事象の参与者の関係についてまとめた。形容詞によって、事象に主体として参与するモノを求めるもの、客体と参与するものを求めるもの、動作主としての人を求めるものなど、様々な形容詞があることを確認した。さらに、形容詞と事象のアスペクト的解釈を確認した。これらをまとめて、形容詞の様々な統語的な実現環境の違

いが、形容詞が事象に優先的に求めるアスペクトの違いによるものであると論じた。例えば、形容詞 I は「活動」的なアスペクトを求める。また、「活動」は継続的な事象で、動作主がコントロールしやすい。そのため、形容詞 I は、動作主を主語とし、事象を述語動詞で表す文に、副詞的用法で表れやすい。一方で、形容詞 II は「到達」的なアスペクトを求める。「到達」は一瞬で終わる事象なので、動作主が事象をコントロールしにくい。また、「活動」とは異なり、形容詞が事象に性質を当てはめる際に、その事象がちょうど展開しているとは限らない。そのため、形容詞は、動作主が明示されない受動的な文や、事象が成立するかもしれないという、「可能」のモダリティを含む文に現れやすい。

第 6 章で、本論文の分析結果を総括し、今後の研究課題を述べた。

本論文の成果は、主に次の 2 点である。まず、ドイツ語で事象を項に取る形容詞について、その統語的な分布を調査し、形容詞ごとに現れやすい用法が異なることを明らかにしたことである。次に、従来、別個の研究としてそれぞれに論じられていた、Vendler (1968) による英語形容詞の分類と、Vendler (1967) による英語動詞の語彙的アスペクトを重ね合わせ、形容詞が現れる統語的な環境の異なりを、事象のアスペクトを手掛かりに説明したことである。